“Take Me or Leave Me”－演劇教育における自分らしさの探究

住田　光子*

“Take Me or Leave Me”: Seeking a Sense of Oneself in Theatre Education

Mitsuko SUMIDA

The purpose of this practical report is to show multiplicity in male students’ perspectives about gender and social consciousness in the new specialized subject of the international communications program, “Communication Studies I” which started for the fourth-year students of NIT, Tsuyama College from 2019. In this course, students reconsidered their own perspectives on topics of gender, including feminism, gender bias, LGBT people, and HIV by discussing the rock musical, *Rent*. In consequence, they came to notice the prejudice of the people of U.S.A. in the late 1980s toward HIV-positive people, and further, to know the significance of embracing multiplicity of perspectives, such as gay or transgender. The students finally noticed a free choice in life among sexual minorities concerned with seeking an answer to what is a sense of ‘genuine’ in oneself.

Key Words: Theatre Education, Rent, Individuality, Gender Consciousness, HIV, Sexual Minorities

１．目　　的

2019 年、国際連合の定めた世界目標 SDGs を意識し「きかんしゃトーマス」に女の子機関車レベッカとニアが増え、男の子と女の子の数が同等になったというニュースがはいってきた。国際連合とイギリスの「トーマス」とのコラボ企画だが、学校教育だけでなく子どもたちの人気アニメ・キャラクターにも、ジェンダー平等を実現しようとのコンセプトが取り入れられたことに驚かされた。

本稿は、2019 年度から新たに開講された「コミュニケーション学Ｉ」の実践報告である。本校の新カリキュラムに基づく「国際コミュニケーション推進プログラム」科目において、総合理工学科の 4 年生は、ふたつの科目を自由に選択する。本プログラム科目は、グローバルな視点と社会性の養成を目指しており、技術者教育プログラムとの関連では、「Ｂ（Ｂ－２）地球上の多様な歴史観・文化・習慣の違いを理解し，説明できること」を学習・教育到達目標としている。そこで、理工学生に、演劇と映像芸術を通して、異なる時代のなかに認められる多様な考え方や価値観を知り、芸術において普遍的に扱われてきたテーマを、学生の生きる時代に身近な問題としてとらえ直す科目を設定した。演劇を通して社会とひとびとのつながりを考えるというのがねらいである。その裏には、技術者としてどのような人生選択をするかを考えてほしいというコンセプトがある。演劇は、虚構であることを観客は十分に意識しながら、その非現実の空間を疑似体験するという性質の強い大衆娯楽である。教育のなかで演劇を取り上げると、ふだん話題にすることがためらわれる問題を意識化できるという強みを有している。そのひとつに<性>の問題があるだろう。

本科目の履修者は、女子 1 名、男子 39 名である。ほとんどが男子学生であるというクラス特性を活かして、ある授業回で、男の幼児向けの早期教育としてのフェミニズムの絵本を読みきかせた。あわせて、アメリカの 80 年代、HIV（Human Immunodeficiency Virus:ヒト免疫不全ウイルス）陽性[1]の若者たちというマイノリティの生き方を描くミュージカル『レント』（*Rent*）[1)] からレズビアンとバイセクシャルの女性の同性カップルを取り上げた。この実践報告では、こうしなくてはいけないという道徳的な価値から離れて、男子学生がいかに自由な読みを展開しているかを示してゆく。議論されたトピックはフェミニズム、性差による偏見、LGBT、HIV など、多岐に渡る。さらに、技術者を目指す理工学生にとって、演劇というこれからの人文系教養教育がどのような可能性をもつのかに触れ、本実践報告のまとめとしたい。

原稿受付　令和元年 9 月 19 日

＊総合理工学科　機械システム系

２．男女についての意識と演劇教育

2002 年から 2003 年にかけての第 7 回世界青年意識調査報告書をみると、18 歳から 24 歳までの青少年のジェンダー意識は、欧米諸国に比べ日本や東アジア地域では解放が遅れているとは一概にはいえないことが示されている。日本は母性からは解放されているが、性別役割分業にはとらわれている傾向が指摘されている[2)]。それでも、日本において、1977 年の調査では「男は外で働き、女は家庭を守るべきだ」という見方への反対派は 31.7%であったが、2004 年では反対派が 68.5%となり、数字は伸び続けてきた[3)]。

さて、テレビ・ドラマによる大学生のジェンダー観の調査研究(2019)によると[4)]、大学生が「性別役割分業」というような意識を認識している傾向がみられている。しかしながら、その一方で、「性差による否定的な評価」、「男性優位の言動や社会通念・習慣」を学生が認識していない傾向が指摘されている。社会のなかで偏ったジェンダー観が形成されているにもかかわらず、この年代の学生本人に意識されていないケースがあることが窺える。そういった状況を避けるべく、演劇教育を通して、高等専門学校の 18 歳から 19 歳という就労前の段階で、世界のひとびとの意識のなかにどのようなジェンダー観があるのかを知り、日本人の視点でみずからのジェンダー観や性への意識を見つめなおす機会は貴重であろう。

本授業は、筆者のロンドン滞在中の体験（2019 年）に端を発している。ロンドン市内でダブルデッカーの 2 階に座っていた。ちょうど前のシートで、ゲイ・カップルであろうと思われるが少年たちがキスをしていた。その真後ろで目のやり場に困った筆者は、隣のわが子がその様子を見ていないことを咄嗟にねがった。これが、レズビアンとバイセクシャルの女性のコミットメント（法的な結婚にとらわれない形の婚約）を演劇教育でとりあげるきっかけである。

３．方法、提示の流れ

３．１　ジェンダー：言葉の説明

言葉の説明として、ジェンダーとは、解剖学的性別からみた「男女の性別」の他に、「社会的・文化的観点からみた性別・性差」の意味があることをわかりやすく示した。さらに、80 年代後半以降、盛んになってきたジェンダー研究では、自己のジェンダーについての認識が社会や文学のなかでどのように形成されるのかを分析するものであることに着目させた。

３．２　課題の提示

（１）課題

以下の課題を与えた。「ジェンダーとじぶんらしさについて考察しなさい。絵本、３つの映像を通して。」2019 年 6 月 18 日の授業にて実施。「上演/フィルム・シート」（A5 サイズ用紙）への自由論述形式による。回答数は、先進科学系 5 人、機械システム系 15 人、電気電子システム系 9 人、情報システム系 7 人の計 36 人。なお、クラスには上記以外に女子が 1 人いるが、男子の発言における、オブザーバーとして機能した。

（２）絵本の読みきかせ：*My First Book of Feminism (for Boys)*（資料 1）[5)]

資料 1.　絵本の訳　　＊筆者による。

My First Book of Feminism (for Boys)

By Julie Merberg

おかあさんを敬うことは　りっぱなおこない。
だっておかあさんは、あなたを生み出したひとなんだから。

泣く、愛する、悲しむことは、いいこと。
おとこのこは、うれしいとか、おこっているとか、それいじょうのことを感じる。

いつか成長すると、からだがおおきくなり強くなるでしょう。
もし力とは筋肉のことだと考えるのなら、あなたの考え方はまちがっている。

思考力をはたらかせて正しいことのために、声をあげよう。
おんなのこは力強いものだと知ってね。
あらそいごとに勝つためには言葉をつかって。

（中略）
食べるとき、お皿をきれいにして。
おしっこをするときには、便座をあげて。

あなたのあとには、（トイレを）きれいにして。
ほかのひとのことをかんがえて。きれいにしてね。

できるだけはやく、かんたんなかたづけができる。
ベッドをつくる。ごみをだす。
洗濯ものをたたむ。床をきれいにする。

おんなのこのしごと、おとこのこのしごとなんてない
―できることをして。
あなたのあとに片づけるのはだれのしごとでもない。

熱心にしごとをするようになるなら、すばらしいことができる
―火事を消す、パンを焼く、宇宙船を飛ばす、
学校で教えるとか。

まいにち、むかうのが楽しくなるようなしごとを見つけなさい。
いっしょにはたらく女性があなたとかわらないおかねを
もらわなくてはならないことを知ってね。

もしおんなのこが「さわらないで」というなら、行ってというなら、
ひとりにしなくてはならない。なぜって、いやは
「いや」なのだから。

正しい世界はあなたの見方のなかにある。もしあなたがこの
スローガンをひろめるのなら―女性の権利は、人間の権利。

尊敬のきもちをいだいて。親切であれ。公平であれ。
それには理由がある。女性は、空の半分をささえているのだから。

絵本のタイトルである “Feminism” が男女同権

主義、女性解放論の意味であることを示した。さらに、同書が幼児のための早期教育の本であること、男女平等主義、男女同権について、子どもたちを啓発する英語圏の絵本であることを断ったうえで、プロジェクターで絵本の各ページを映し、英語の文章を日本語に通訳して読みきかせた。その後、学生に気づきをメモさせた。この絵本は、幼児向けの啓発本であるため、他の年代の人が読むと教訓的だととらえられる部分がある。例えば、“Someday when you're grown, you will be big and strong. If you think strength means muscles, your thinking is wrong” (いつか成長すると、からだが大きくなり強くなるでしょう。もし力とは筋肉のことだと考えるなら、あなたの考え方は違っている)という一節がある。さらには、若者にとって、社会のなかにある「性別役割」の見方から離れた発想を考えることができるフレーズがある。そのひとつが、“Find a job that you'll love heading off to each day. Know the women you work with must earn equal pay” (まいにち、むかうのが楽しくなるような仕事を見つけなさい。いっしょにはたらく女性があなたとかわらないおかねをもらわなくてはならないことを知ってね)という箇所であろう。読みきかせにおいて “If a girl says 'don't touch me!'or asks you to go, you must leave her alone—because no means NO!” (もし女のこが「さわらないで」というなら、行ってというなら、ひとりにしなくてはならない。なぜって、いやは「いや」なのだから)というページは、毅然とした調子で読みきかせた。

（３）ミュージカル 『レント』 (*Rent*) の知識

まず、学生には演劇についての知識を与える。1996 年から 12 年間ロングランをつづけた『レント』は、80 年代ニューヨーク、イースト・ヴィレッジに住む芸術家たち、HIV ポジティブ（陽性）であり、今月だけでなく先月もその前の年も家賃を払えないようなボヘミアン[2]を描いたミュージカル演劇である。1996 年 1 月 26 日初演前夜、大動脈瘤破裂のために、35 才で逝去したシンガー・ソング・ライター、ジョナサン・ラーソン（Jonathan David Larson 1960-1996）の遺作である。物語は、1989 年クリスマスから、映像作家のマークが追った 1 年を扱っており、アメリカのひとびとのアイデンティティの多様性を象徴するように、HIV 陽性患者、同性愛者（ゲイ、レズビアンなど）、ドラァグ・クイーン（異性装の男性）、バイセクシャル、麻薬中毒者、ボヘミアンといったさまざまなマイノリティが登場する。アメリカでは 2015 年 6 月 26 日、連邦最高裁判所が同性婚を合憲と認めた。それよりもっと前の時代、80 年代では、州によって同性婚の扱いは異なっていた。そのため、同性カップルが結婚に縛られることなく、自分たちのやり方でコミットメントを交わすというあたらしい愛の形が演劇には描かれていた。70 年代の性の解放の動きがあり、80 年代ではエイズ[3]が大きな社会問題となっていくが、そうした時代の後に、若者たちの間にレントヘッズ（RENT-heads :『レント』を熱狂的に支持するひと）が続出した。オフブロードウェイから生まれた演劇は、若者の絶大な支持を得た。当時、HIV 陽性の若い男性が、涙を流しながらこの演劇を観ていたのは、「今日という日しかない」(No Day but Today) というヒット・ナンバーに窺えるような、HIV 陽性でありながらもポジティブに生きていこうとする若者たちの姿に共感していたからである。そして、たとえ彼らの先に死が待ち受けていようとも、どのようなマイノリティの存在も受け入れようとする演劇の世界観に、あたたかみや救いを見出していたからである。

（４）シーン分析

『レント』は舞台のライブ映像もリリースされているが、[6] 舞台のオリジナル・キャストを集めて制作された映画版『レント』(2005) をあえてとりあげることにした。[7] そこには、80 年代の社会の意識を感じさせるようなミザンセーヌ[4]が散りばめられているからでもある。次の連続したシーン（ひとつの映像）を観た。

シーン A: 女性同士のカップルの
　　コミットメント・パーティー
シーン B: “Take Me or Leave Me”のナンバー
(資料 2)

資料 2. 歌詞の訳　　＊筆者による。

“Take Me or Leave Me”

モーリーン（ジョアンヌに向かって）:

どんな日でも
ストリートを歩くと
こういうのが聞こえる。
「ベイビー、ほれぼれする。」

年頃になってからは
誰もがわたしを見つめるの。
男の子も女の子も
わたしにはそんなのどうしようもできないわ。

だからやさしくして。
気がへんにならないで。
わたしはあなたの恋人だってこと
忘れないで。

ありのままの私を受け入れて。
なるべくしてこうなったわたしを。
不満があるなら
わたしを受け入れて。そうでなければ別れて。
（くりかえし）

檻のなかの虎は
太陽を見られない。
この歌姫にはじぶんのステージがひつよう。
ねえ、楽しもうよ。
わたしが選んだ靴はあなた。
ひとはあなたという靴をうめるためには
殺しもいとわないわ。
あなたも、注目されるのはすきよね。
だからわたしの恋人でいて。
そうでなかったら「あなた、それでも恋人なの？」
って泣いたりしてわたしの時間を無駄にしないで。

ありのままのわたしを受け入れて。
なるべくしてこういうふうになったわたしを。
不満があるなら
わたしを受け入れて。そうでなければ別れて。

むりよ、じぶんでないじぶんになるなんて。
でも、ねえ、恋人がセクシーでいてほしいって
おもわない？
けんかしないで。うろたえないで。
だっていつも夜あなたのベッドにいるのは誰？
ベッドにいるのは誰、ねえ？
キスして、プーキー。

まず、シーン A では、ニューヨークのストリートで、パフォーマンス・アーティストのモーリーン（バイセクシャル）と弁護士のジョアンヌ（レズビアン）の女性たちがコミットメントを交わしている。傍らその様子を見つめる男性マイクは、“It can't be happening”(ありえない) と不満そうある。マイクは、モーリーンの元彼。おもしろくないのは、魅力的な女性モーリーンに未練があるからでもあり、幸せそうな同性パートナーたちを見つめる、ありふれた市民の視点をも表している。

次に、学生は、シーン B の曲の歌詞(資料 2)の解説をきいた後、そのナンバーが歌われるシーンを観る。女性同士がぶつかりあうシーンである。映画版のコンテクストは、次のようである。ジョアンヌとモーリーンはパートナーになることを誓うにもかかわらず、コミットメント・セレモニー(commitment ceremony)の場でさっそく口論になり、モーリーンは“Take Me or Leave Me”(わたしを受け入れるか、別れるか)と迫る。同性パートナーからもステレオタイプを期待されることにうんざりする女性が「檻のなかの虎は太陽を見られない」、「ありのままの私を受け入れて。不満があるなら、わたしを受け入れるか、そうでなければ別れて」と主張する。つまり、「むりよ、自分でない自分になるなんて」という言葉には、生き方を強要されることは、アイデンティティの崩壊であることが仄めかされている。学生には、“Take Me or Leave Me” というナンバーにおける、女性パートナー同士の喧嘩を観ることで、そこにある「自分らしさ」が何であるのか考えてもらい、性差を意識した上で自分はどうありたいのかを意識化させることがひとつのねらいである。この課題解決がユニークなのは、性に対して寛容な 80 年代のアメリカ社会における価値観を、いまの日本の若者たちがどう受けとめるかを問いかけているからである。

シーン A、 B とともに、80 年代の社会のエイズへの意識や偏見を知ることのできる情報を学生に与えた。映画『レント』を監督したクリス・コロンバス (Chris Columbus) は映像では、エイズで死ぬドラァグ・クイーンのエンジェル（Angel）の葬式に人が少なく、家族や親族とおぼしきひとが参列していないことを語る[7]。つまり、映画のミザンセーヌに関して、監督は、ある人がエイズになった場合、親族が本人と疎遠になるケースもあったという 80 年代の時代を反映させた映像構成であることに言及している。『レント』は 1989 年から 1990 年の時代設定であり、おもに 80 年代のニューヨークが投影されている。

（５）履修者の考察

３．２（１）の課題について学生は論述をした。

（６）付随する映像の提示

映像 C: “Take Me or Leave Me” -- Keala Settle & Anika Larsen: キアラ・セトルとアニカ・ラーソンのライブ・パフォーマンスによる女性同士の口論の映像

映像 D: Aaron Tveit and Gavin Creel Sing “Take Me or Leave Me” from RENT at MCC Theater MISCAST Benefit: 同じシーンのゲイ・カップルに置き換えた映像

舞台上での“Take Me or Leave Me”のライブ・パフォーマンスを 2 種類観てもらった（映像 C, D）。ユーチューブを利用した。まず、女性の不満の内容やその性を感じさせるしぐさを含め、どのような感情をぶつけているのかが窺える映像を観る。あわせて、オーディエンスがそうした滑稽なやり取りを受け止めて笑っている様子を観る。特に、劇場空間のなかで、このナンバーが歌われる時、俳優と観客の間で、どのような意思疎通がなされているのかを観察させる。ここで留意したのは、同じ曲であるが、レズビアンとバイセクシャルの女性（映像 C）から、ゲイの男性同士（映像 D）への置き換えである。一連のやりとりが女性間から男性間にかわることで、微妙なニュアンスの差異が生まれるのを肌で感じてもらうことがねらいである。女性同士のアイデンティティのぶつかりあいと男性同士のアイデンティティのぶつかりあいである。内容は重いものではなく、遊び心あふれたおきかえである。

４．学生からの反応と考察

学生が言及した項目については、下記の通りである(表 1)。

表 1. 学生が考察した項目

<学生が考察した項目>	（単位：人）
先入観・固定観念	12
LGBT	20
自分らしさ	21
性別役割への疑問	7
男らしさと女らしさ、ジェンダー	23
HIV	3
性差別	13
絵本:女性が男性より上	3
絵本:男性は自分らしさを制限されている	5
＊36名回答。複数項目の回答あり。	

４．１　絵本

絵本の内容については、資料１を参照されたい。論述のなかに、女性である筆者にとって予想外の回答があった。それは、数人の学生から出ていた。以下、「」のなかに学生の原文のまま記す。「フェミニズム(という絵本)だと女の子は自分らしさを表現できても、男の子は自分らしさを制限されているように感じた」という声である。読みきかせの後、教室内で数人に感想をきいたところ、女の子の方が男の子よりも上の感じがしたという声がきかれた。この発言に影響された学生も複数いたとも考えられる。絵本の教訓的な調子について、男子学生は違和感を抱いていた。それは、女の子が男の子より上であること、さらに、(絵本の世界では) 男の子は自分らしさを表現できていないという点である。「男だから「これをやらなければならない」とか女だから「これをやらなければならない」という固定観念があるがよく考えればそんなことはなく、男女に差はあってはならない」という学生の見方にあらわれているように、「性別役割」の発想自体を偏っているとみなす見方に通じていた。と同時に、上記の声は、自由で寛容でありたいと願う学生からの反発でもあった。絵本のなかに認められる、女性は弱いものだから、配慮しなくてはならないというとらえ方が、違和感のあるものに映っていたと推察される。そうした見方は、女性を上にとらえることであると批判されていた。では、絵本にみられるような社会のなかにあるジェンダー観を踏まえて、自分らしさとはどうあるべきなのか。「社会が求める男らしさ、女らしさにとらわれず、自分らしさをもって自己表現をすることが大切」と記述した学生がいた。この見方は、多くの学生の声を集約していたかと思われる。

４．２　『レント』

シーン A、B について、さまざまな観点から学生は考察していた。『レント』 のコンテクストに言及したものをいくつか考察する。

（1）ストリートで永遠の愛を誓う女性たちをみた男性、マークが「まじか、ありえない」というシーンに関して、学生から「レズビアンに対する偏見や理解の無さを示している。レズビアンに対して理解のある人、ない人が混在してるためだ」との声があった。レズビアンとバイセクシャルのカップルについて自然なものを感じながら、問題が周囲の理解の欠如にあるととらえた学生がいた。また、「男女の愛ではなく女同士の愛を誓っていた。周りの目を気にせずに自由に恋愛することは、自分らしさを表現できていると思った」という声もあった。自分らしさを表現するうえで、ジェンダーの問題を避けられない点にも目を向けていた。

（2）モーリーンは、街を歩けば男女を問わず、ほれぼれすると声をかけられる。モーリーンはその非が自分にあると咎められることに関して、「檻のなかの虎は太陽を見ることができない」とジョアンヌに不満をぶつける。このシーンに関して「映画をみて、バイセクシャルのひとと、レズビアンの人が付き合っていたのだが、付き合いづらい世の中だったと思う。また、二人の言い合いの中で、おりの中にとじこめられたトラといったが、生きづらいことを表現しているのだ」と考えた学生がいた。物語では、ジョアンヌがうんざりするから、モーリーンは乳首にピアスをあけるのをやめる。それだけでなく、モーリーンがジョアンヌ以外の男女と懇意になると、批判されるため、過剰な干渉だと思う場面がある。物語では、「檻」という言葉には、社会の常識に従った形でのパートナーらしさを強要されることに対する不満がある。それに対して、この学生は「檻」という制約を、社会のなかにある、LGBT (Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender)に対する偏見によって自由の奪われた状態としてとらえていた。

（3）ゲイのエンジェルの葬式。映像のなかには、参列者に友人はいるが、親族らしき人物がみあたらないこと:「ゲイのカップルが HIV に感染し死んでしまった際、親族は葬式にいなかった。このことから自分の家族にゲイで HIV がいたと思われたくないためだと思われる。これは親族が悪人というわけではなく、自分もそのような人間だと思われるのではないかという恐れからくるものではないかと思われる」という学生の考察があった。80 年代のアメリカ社会のなかにある、HIV 陽性者に対するひとびとの意識を読み取っていた。しかしながら、その一方で、免疫力の低下に伴うエイズの発症や HIV の感染予防についての知識が十分にあるとはいえない。ひとびとのなかにある偏見が、病気と性行為に関する何の部分に由来するのかを意識して当時の社会のなかにある批判的な風潮に言及できるとよいだろう。

（4）その他の考察をみる。太字で、考察された項目を記した。

自分らしくあるために、多様なジェンダーのあり方とどのように向きあうのかという点についてである。比較的多くの学生が、ジェンダーに関して、まず、多様な性のあり方を<受けとめること>、自分と異なる価値観を<受容すること>の意義を主張している。それは、若者の考え方の柔軟性をも示している。なかには、みずからの性を否定することは、

自分らしさを否定することにつながりかねない点を危惧する声もあった。

自分らしさ：「自己ジェンダーとは他人と少しずつ違うものであり、男女の２つで自分らしさが生まれるのは必然であり、それを否定することは、その人そのものを否定するようなものだ。」「じぶんらしさ、自分の存在意義などを意味するアイデンティティでもある性別を押し殺してまで、生きる必要はない。」

LGBT と自分らしさ:「LGBT について、好きな人が違うというのは当たり前の事で、それが同性であったというだけで、それも個性で自分らしさなので、同性婚なども当たり前にできるべきだと思った。」「レズビアンもホモも周りから見たらまだ少し抵抗がある。ジェンダー（？による偏見）をなくすということは「受け入れる」という言葉が重要だと思う。」

LGBT という違いを、人間の個性としてとらえる見方は、ひとつの視点にとらわれない発想であろう。80 年代のアメリカでは同性婚が認められるかは州によって異なっていたが、同性婚が認められていない日本において、男子学生のなかに同性婚を容認する見方があるのは注目に値する。日本の法律では同性間の婚姻は認められていないが、さまざまな意識の変化がある。近年、トランスジェンダーの学生を受け入れる女子大学がでてきた。また、パートナーシップ制度を認める自治体が増えてきている。学生の考察は、そうした社会の意識の変化を受けとめたものであろう。その一方で、学生の一部が、少数派としての LGBT のあり方に違和感を抱くのも自然な流れであろう。LGBT に関してはさまざまな見方がなされるなかで、ある学生は、次のように、社会において暗黙になされている、価値観の強要を拒もうとする。

価値観：「異なる性別に自分の価値観を押し付けてはいけないものだと思う。同性愛などは、社会的でも個人的でもなくその本人の意思を尊重することが求められていくのではないかと思う。」

ひとつの解決策として、異なる価値観を受け入れる必要性を主張しているように思われる。ただ、LGBT の問題が、性のあり方によっては病気のリスクと隣り合わせであることに慎重になる必要もあるだろう。

次の学生は、性差を受けとめたうえであらためて自分らしさとは何かを考察している点で注目に値する。

ジェンダー：「ジェンダーは複雑で根絶することは容易ではない。社会規範と大きくかかわる事、社会に深く根付いている事、普遍化してしまい問題自体に気づき難い。「男らしさ」「女らしさ」にこだわりすぎて、なかなかその人の個性を尊重できない。」自分らしさを追求する過程で、社会で求められている男らしさ、女らしさが、自らがとらえているものと隔たりがあることに気が付き、戸惑うこともあるだろう。この学生の気づきは、社会や文化のなかで知らず知らずのうちに形成されているジェンダー観をあらためて考えさせてくれる。若者がふだんその点を意識せずに生活していることも窺えるであろう。性別役割という見方に関して「女の子だからこうしないといけないとか男の子だからこうしないといけないというのは違っている」と主張した学生がいたが、自らの価値観と向き合うことなく、このような見方ができるとは限らない。社会のなかで意識されにくいものをあらためて意識するためには、多様な価値観に触れる必要がある。そのうえで、もっと柔軟なもののとらえ方ができるのかを考え、自らのジェンダー観を見つめ直すことの必要性を、上記のコメントは示しているであろう。

５．演劇教育という観点から

ここでは、演劇『レント』の特殊性を演劇教育のなかでどのように生かせるのか、そのひとつの実践例を簡単に記す。演劇教育において、大切にしている点がある。それは、こたえを与えないということである。そのために、ふたつのテーマを同時進行させる。ひとつは、教師が講義するテーマである。もうひとつは、学生が自分でこたえを見出すためのテーマである。『レント』は、マイノリティを扱った演劇である。そして、HIV をテーマとするからこそ性に関してこれでもかと思われるほど寛容である。特に、身体と声のパフォーマンスを通して、ステージで複数の俳優が性行為を演じるシーンでは、セックスへの憧れと疼きが露わになっている[5)]。そうした部分を告白するこの演劇は、およそ 18 歳から 22 歳の年代の学生に影響力のある演劇のひとつである。大学生向けの演劇科目において、印象に残った演劇をきくと、圧倒的に人気があるのが『レント』である。『レント』に関しては、舞台のライブ映像が収録された DVD や[6)]、映画版の DVD も市販されている[7)]。家庭で気軽に鑑賞することができる舞台芸術作品のひとつである。

海外での学生の『レント』の上演では、つい先ほどまでステージで歌っていた学生らが、終演後には缶を持ちオーディエンスに HIV 患者のための募金を呼び掛けているのを目にする。また、幕間では、オーディエンスが「1 年間の、52 万 5600 分を何で数えよう？あなたの人生を愛ではかってごらん」

写真 1. 『レント』のステージ

というフレーズでおなじみの曲“Seasons of Love”を口ずさんでいることがある。この演劇の大衆性が窺えるだろう。上演空間には、例えば鉄骨のセットとロックンロールの演奏スペースと星条旗があるだけ（写真 1）、[8] また、メンバーが横にずらりと並ぶための長いテーブルがあるだけ（写真 2）[9] である。このようにシンプルな舞台演出にもかかわらず、ステージでは音楽を通してオーディエンスとパフォーマーが一体になってパフォーマンスをつくりあげる側面の強い演劇である。

写真 2. 『レント』のステージ

『レント』には、たくさんの切り口があり、どこを取り上げてもディスカッションとなりうる。筆者は、『レント』を取り上げる時は、HIV（ヒト免疫不全ウィルス）が免疫細胞に感染し、引き起こされた免疫不全の状態が、エイズであることを説明する。加えて、その病気の原因を教える。母子感染、血液による感染、コンドームなしの性行為など、おもな原因に触れることにしている。そういった知識を土台に、演劇からの問いかけを学生にゆだねる。「おわってしまった」(It’s over) 、（コンドームなしで）「後悔するのは、あなた？それとも、わたし？」(It was bad for you? Was bad for me?) という問いかけである。若者たちの言葉の “over” には、性行為がおわったという意味と、大切な友達の生命がおわってしまったという意味がかけられている。この演劇を通して、若者たちは、ゲイでありエイズで死ぬエンジェルの姿に胸を痛めるであろう。若くして、恋人の男性を残したまま、合併症に伴う体温異常に苦しみ死んでいったエンジェルは、ミュージカルの陽の目を見ることなくマルファン症候群で死んだ若き芸術家ラーソンに重なる。そうしたひとつの演劇の意思を受け継ぐかのように、『レント』では、演劇空間で演じ手と受容する側がつながってゆく。この演劇における性の描写を露骨すぎるとオブラートに包むこともできるが、筆者はそうした演劇のなまなましさを学生には伝えるようにしている。そうして、ひとつの選択をオーディエンスにゆだねる。それだけでなく、性行為への無知から起こりうる HIV のおそろしさも、あるがままを提示することにしている。学生は『レント』のボヘミアンのように、保守的な社会の価値観に抗うジェンダー観を肯定することもできるだろう。

６．考察と展望

本実践報告では、おもに第 4 章にて学生の自由な読みを示し、それに対する考察を加えた。自分のなかにあるジェンダー観を認識し、自分らしさを見つめなおすという実践のひとつである。

授業では、絵本でフェミニズムの見方に触れたうえで、演劇と映像芸術を通して、80 年代アメリカの HIV 陽性者と LGBT に対する意識をとらえることで、そこにある価値観が、時に偏った意識に根差しており、演劇のなかの LGBT の生き方の選択こそ、みずからの性差を受け入れたものであることに学生は気づくことになった。授業を通してあがった声のすべてをひろうことは難しかったが、できるだけ異なる項目の声を取り上げることで、履修者の多様性、さらには、とらえ方の多様性や発想の自由さを示すことにつながったと思われる。

新カリキュラムのもとで、グローバルな視点と社会性の養成という視点で『コミュニケーション学Ｉ』は新しく開講された。技術者の教育において、専門的知識の習得、実践的な能力の養成はいうまでもなく軸である。その一方で、人文系の教養教育の意味は社会性の育成であり、知識の習得だけでは得られない職業倫理に関わる。技術者が男性も女性もお互いの価値観を尊重しながら、足りないところを補いあえるような寛容さをもって活躍してほしい、さらに、日本だけの視点や多様性にとどまることなく、時代の流れのなかで柔軟なものの考え方で自分だけの人生を選択してほしいという願いを込めて「わたしを受け入れるか、別れるか」というジェンダー観や性を見つめる授業を設定した。演劇教育では「それでは、あなたはどう生きたいのか」を学生ひとりひとりに問いかけることにしている。学生が選択科目のなかで

芸術関連科目を選択できる意義はそこに根差している。

技術者教育において、芸術教育は必要なのかという問いに関して“Take Me or Leave Me”という歌詞さながら賛否両論があると思われるが、演劇はいつもひとびとのなかにある普遍的な問題に向きあわせるものであることを附言しておく。筆者が見たゲイの少年らのキス。演劇の考察を通して、ある学生は、生理的に嫌悪を感じる人もいるから配慮を求め、ふたつの性の身体的な区別やジェンダー意識の理解がすすむことを願っていた。筆者は、自分のなかにあるジェンダー観をもういちど見直そうと思ったのだが、学生はそれ以上のことを意識し始めていた。ひとつの事象を観察し、少し離れたところに立って冷静に考察を加える。演劇教育のなかで、ジェンダーをめぐる<こたえ>を与えていないが、技術者ならではの鋭い分析力に基づいた社会性は、本科目のなかで確実に育ってきているといえるであろう。

なお、本科目履修の 4 年生は、筆者が 2 年次に英語科目を担当した学生で、冗談もいえるし、気心の知れた学生ばかりであった。そうした信頼関係のもとに、演劇教育のなかで何でも言える土壌があったことを記しておく。

謝　辞

本実践報告を書くにあたり、授業での思い思いのコメントを引用することを許してくれた男子学生の配慮に女性教員として感謝する。また、フェミニズムの教材導入に関して背中を押してくれた社会系教員、2019 年度、演劇教育の導入を決めてくれた本校に感謝したい。最後に、『レント』の公演の魅力を教えてくれた尾道市立大学の田中夕萩さん(2012 年度在籍生)に感謝したい。

参　考　文　献

1) Jonathan Larson: *Rent*, Written and Composed by Larson (1996).
2) 平成 14,15 年第 7 回世界青年意識調査報告書，総務庁青少年対策本部, (2004)第三部第二章第二節「ジェンダー意識の多元性」.
3) 2)と同書，第二部第七章第三節 a「男女の役割観」.
4) 藤田昌子，藤田智子：大学生のジェンダー認識に関する一考察—連続テレビ小説「おしん」を題材にして，愛媛大学教育学部紀要，56(2009)253-258.
5) Julie Merberg: *My First Book of Feminism (for Boys)*, Illustrated by Michéle Brummer Everett, Downtown Bookworks (2018).
6) J. Larson: *Rent*: *Filmed Live on Broadway*, Directed by Michael John Warren, Sony Pictures Home Entertainment (2015).
7) J. Larson: *Rent*, Directed by Chris Columbus, Paramount Pictures (2018).
8) *Rent*. By Larson. Perf. Captivate Drama, in Edinburgh Festival Fringe 2013, Musical Theatre in Broughton High School, Edinburgh, 8 Aug. 2013.
9) *Rent*. By Larson. Perf. Horizons Theatre Company in Edinburgh Festival Fringe 2015, Nicolson Square, Edinburgh, 9 Aug. 2015.

注

1　HIV とは「ヒト免疫不全ウィルス」であり、これに感染したひとを HIV 陽性者とよぶ。青木美由紀『ぼくは 8 歳、エイズで死んでいくぼくの話を聞いて。』合同出版, 2010 参照.

2　芸術家など、社会のしきたりにとらわれずに自由に生きるひとたちのこと。

3　HIV がヘルパーT リンパ球という白血球などに感染すると、免疫システムが破壊される。それにより免疫が低くなり、病気を発症するようになった状態を「エイズを発症する」という。前掲書参照.

4　ミザンセーヌ (mise en scéne) とは、演劇からきた言葉で「演出すること」の意味のフランス語である。映画では、監督によってなされる仕事を示す。スティーヴ・ブランドフォード他著『フィルム・スタディーズ事典』フィルムアート社, 2004 参照.